

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 18 号

2020（令和2）年4月

聖心女子大学

氏 名 FU JIAHUI (ふ かけい)

学位の種類 博士 (心理学)

学位記の番号 甲第 43 号

学位授与年月日 2020 年 (令和 2) 年 3 月 14 日

学位授与の条件 聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当

審査研究科 聖心女子大学大学院文学研究科

論文題目 パズル課題と動画に対する子どもたちの行動
——日本、中国、韓国の子どもの違い——

論文審査委員 (主査) 教 授 川上 清文
(副査) 教 授 佐々木 正宏
(副査) 准 教 授 岸本 健
(副査) 名誉教授 青柳 肇 (早稲田大学)

博士学位論文の要旨

1. 本論文の構成

本論文では、日本・中国・韓国の3, 4歳の子どもにおける行動の相違を3つの研究から捉えている。パズル課題と動画鑑賞において観察したデータを用いて、行動・言葉・表情の特徴を検討した。

従来の文化心理学では、東洋と西洋の比較という視点が数多く取られてきた。Markus & Kitayama (1991)を代表として、東洋と西洋を比較する時、日本または中国が「東洋」の代表として使われ、欧米の国と比較されることが多い。子どもを対象にした研究では乳児と母親の関係において、アメリカの母子の方が日本の母子に比べ、アクティブに反応することが分かった(Caudill & Weinstein, 1969; Borstein et al., 1987; Fogel, Toda & Kawai, 1988など)。また、中国と西洋の子どもたちを対象にした研究では、中国の幼児の方が順守行動が多く、社会的評価に注目しやすく、謙虚であった(Chen et al., 1998; Li & Wang, 2004; Fu et al., 2016)。大人を対象にした研究では、日本人は感情の表現や、表情の解読については、アメリカ人と異なっていた(Ekman & Friesen, 1971; Shimoda et al., 1978)。また、東洋人は西洋人よりネガティブな情動を表現せず、ポジティブな情動を多く表現することが分かる(Tsai et al., 2006など)。東洋人は西洋人よりも図と地の両方に注目するが、西洋人は地に注目することが分かった(Masuda & Nisbett, 2001; Henrich, 2016)。そして中国人よりアメリカ人の方が感情表現が多く、直接的である(Tinsley & Weldon, 2003; Immordino-Yang, Yang, & Damasio, 2016; Wu, Li, Zhu, & Zhou, 2019)。

日本では、数多くの「日本人論」が提出されてきたが、Markus & Kitayamaの論文(1991)によって、全世界を「集団主義」と「個人主義」という2つの文化に分ける視点が出現した(高野, 2008)。しかし、高野(2008)は日米の集団主義の比較研究の結果をまとめると、日本と米国の集団主義の強さは同じであることを明らかにした。果して、東洋人と西洋人を比較するという研究は意味があるのだろうか。また、「オリエンタリズム」という言葉がある。これはサイードというアメリカの文学研究者が最初に使ったもので、欧米人がアジアを考察する時によく使われる(高野, 2008)。前述のように「東洋」にはよく日本または中国などを代表として挙げられている。例えば、Jack, Sun, Delis, Garrod, & Schyns (2016)はイギリスと中国の成人の表情を比較し、「Western and East Asian」と表現している。このように東アジアの国は一つのグループとしてみられやすく、特に日本、中国、韓国などは集団主義で、相手に強い関心を持つことが共通点であるとして(e.g., Lee, 2002; Lee & Rogan, 1991; Oetzel & Ting-Toomey, 2003; Ting-Toomey & Kurogi, 1998)、一つのグループでまとめられがちである。同じ東アジアにある国と国の間には違いがないだろうか(藤永, 1997)。さらに、アジアという括りで扱うことに問題はないだろうか。柏木・北山・東(1997)の『文化心理学-理論と実証』という、日本における文化心理学の集大成の中にもアジアの国の違いについては取り上げられていない。

東アジアの中の国を一括りにしていいのか、日本、中国、韓国には違いがな

いだろうか。実証的な研究はほとんど行われていない。本論文では、日本と中国と韓国の子どもたちを対象として研究し、行動の違いの有無を分析する。

本論文は、研究1から研究3により構成される。研究1では、日本の3歳児20名と中国の3歳児25名を対象として、パズル課題における行動の相違の有無を検討する。研究2では、韓国の4歳児14名と3歳児11名を対象として、研究1と同じパズル課題における韓国の幼児の行動の特徴を検討する。すなわち、研究1は日本と中国の幼児の行動の特徴、研究2は韓国の幼児の行動の特徴に注目し、最終的には3ヶ国の子どもたちのデータを用いて、課題を介した国による子どもたちの行動の相違の有無を検討する。研究3では、動画に対する、日本、中国と韓国の子どもたちの行動反応の相違の有無を検討する。すなわち、研究1と研究2は子どもたちの問題解決する際の行動の相違の有無、研究3は刺激に対する行動の違いに注目し、3ヶ国の子どもたちのデータを用いて、子どもたちの行動を比較検討するのが目的である。

2. 各研究の結果と考察

パズル課題における日中の子どもたちの行動「研究1」

研究1では、日本の典型発達児20名（男児10名と女児10名）、及び中国の典型発達児25名（男児13名と女児12名）の行動を観察した。子どもたちがパズルに取り組んでいる時の動作を10秒間ごとでコーディングした。10秒間以内で項目の有無を記録し、10秒間以内で1回以上出現しても1回とした。そして、子どもたちがパズルに取り組んでいる時の13行動項目を動作、言葉、表情の3つのカテゴリーに分けた。動作項目は「頭を掻く」、「姿勢崩れ、変わる」、「時計を見る」、「周りを見る」、「実験者を見る」という5項目であった。言葉項目では自分への独り言と実験観察者への発話の大きく2種類に分けた。表情項目は「眉間に皺を寄せる」、「眉毛を上げる」、「口を動かす」、「微笑む」、「ため息をつく」という5項目であった。結果は、日本と中国の子どもたちの行動の違いを示した。主な違いとして、簡単なパズルと難しいパズルにおいて、いずれも日本の子どもたちと比べて、中国の子どもたちの項目回数が有意に多いことが示された。日本の子どもたちより中国の子どもたちのほうが問題場面に対して、行動を多く表出すると推測できる。また、パズルに取り組む時、中国の子どもたちは日本の子どもたちより多く「自己主張」の言葉がみられた。研究1の結果、日本と中国の3歳の子どもたちが課題に取り組む際の相違が明らかであった。

パズル課題における韓国の子どもの行動「研究2」

研究1で同じ東アジアの2つの国の子どもたちの行動比較をしたが、研究2においては、研究1で明らかになった日本と中国の子どもたちの違いが韓国の子どもたちではどうなるか、韓国の3歳（男児10名と女児4名）と4歳（男児3名と女児8名）の典型発達の子どもたちを対象として、パズル課題に取り組む時の行動を観察した。韓国の子どもたちにみられた16の行動を分析し、研究1と同様に行動、言葉、表情の3つのカテゴリーに分けた。動作項目は

「頭を搔く」、「姿勢変わる」、「周りを見る」、「実験者を見る」、「顔を触る」、「頬杖」、「机を叩く」という7項目であった。言葉項目では自分への独り言と実験者への発話の大きく2種類に分けた。表情項目は「眉間に皺を寄せる」、「眉毛を上げる」、「口を動かす」、「微笑む」、「ため息をつく」、「そしゃく、舌打ち等」という6項目であった。その結果、3歳児より、4歳児のほうが行動回数が多かったなどの結果が得られた。同じ課題でも、3、4歳児の行動の違いを検討することができた。さらに、子どもたちに取り組んだパズルが難しいか簡単であるかどうか尋ねた時、4歳の子どもたちは3歳の子どもたちより多く答えていた。韓国の3歳児の結果を研究1の結果と比較すると、韓国の子どもたちの行動は中国の子どもたちより多くはないが、日本の子どもたちより多いことが分かった。

動画鑑賞における日本、中国、韓国の幼児の行動の比較「研究3」

研究1と研究2で日本、中国と韓国の子どもたちが同じ課題に取り組む際の、行動に相違を示した。3ヶ国の子どもたちが課題という自分でなんらかの起こした行動によって参与することが求められた状況での違いが分かったが、行動を起こさなくても良い状況なら、どうなるだろう、例えば同じ動画を見た時の反応に違いがあるだろうか。それを分析するため、研究3では日本、中国、韓国の子どもたちの動画視聴時の行動を比較検討した。日本、中国と韓国の3歳の典型発達児（日本15名、中国14名、韓国13名）に3つの動画をみせ、子どもたちの行動観察を行った。評定項目は2つであった。1つの評定項目は子どもが動画をみているかどうかについてであり、「3：よくみている；2：みている；1：あまりみしていない」の3段階で評定した。評定するポイントは子どもがどのくらいの程度で動画を見続けられたかであった。子どもが動画をみている時間を計り、10秒間で9秒以上みていたのは3、9秒～5秒みていたのは2、みていたのが5秒以下のものは1と評定した。もう一つの評定項目は子どもが動画鑑賞中の表情も含む行動を「ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ」の3種類に分けるというものであった。ポジティブな行動の例は「笑い」、「面白い」という発話などであった。ニュートラルは、いわゆる無表情で動画をみる行動とした。ネガティブな行動には「眉間に皺寄せる」などであった。ポジティブは3、ニュートラルは2、ネガティブは1と評定した。その結果、動画に対して、3ヶ国の子どもたちの行動に相違がみられた。研究3の結果では日本の子どもたちが二つ目のビデオで最もポジティブな反応を示し、中国の子どもたちが三つ目のビデオで最もポジティブな反応を示した。

本研究の結果、東アジアの3ヶ国の子どもたちの行動が異なることが明らかになった。これまでの文化心理学でとられてきた東洋か西洋かという視点では、日本、中国、韓国などはひと括りにされてきた。本研究はそれが問題であることを示した。最後の章では、今後の研究の方向性に対する案を提示した。グループ分けする時、国/地理的で境界線を引くよりも、遺伝子情報なども加えて分析する方が妥当だろう。

学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 FU JIAHUI
論文題目 パズル課題と動画に対する子どもたちの行動
——日本、中国、韓国の子どもたちの違い——
審査委員 主査：川上 清文
副査：佐々木 正宏
副査：岸本 健
副査：青柳 肇（早稲田大学名誉教授）

1. 論文の要旨

本論文の目的は、これまで文化心理学の分野で、東アジアとひとくくりにしてきた日本・中国・韓国の子どもたちの行動を分析し、比較検討することである。文化心理学で、多くの研究が積み重ねられてきた。それらの研究では、東洋と西洋の比較という視点を取る場合、東洋の1か国と西洋の1か国を比べることが多い。たいてい東洋の代表は日本か中国であり、西洋の代表はアメリカである。日本・中国・韓国の子どもたちの行動は変わらないのであろうか。東アジアの子どもたちをひとくくりにしていいのか、それを明らかにするために3つの研究が行われ、それぞれがひとつの章を構成している。

第1章は「問題」で、従来の文化心理学の研究について子どもを対象とした研究と大人を対象にした研究に分けて展望している。

第2章は本論文の構成と目的についてまとめている。

第3章からが主題である。第3章では、日本と中国の3歳児たちが3つのパズルを解いた時の行動比較研究について述べている。これを研究1と呼ぶ。

第4章は、研究1で用いた3つのパズルを韓国の3歳児と4歳児に解いてもらった場面を分析している。これを研究2と呼ぶ。

続く第5章では、日本と中国と韓国の3歳児たちに、3つの動画を見てもらった時の行動を比較している。これを研究3と呼ぶ。

最後の第6章において、3つの研究結果をまとめながら、文化比較の問題を考察し、今後の研究のあり方を提言している。

3つの研究結果は次のように要約できる。研究1では、パズルを解く時、中国の子どもたちの方が日本の子どもたちより、行動表出が多いことが明らかになった。研究2の結果、韓国の4歳児は3歳児よりも、パズルを解く時、行動表出が多いことがわかった。韓国の3歳児の結果を研究1の日本と中国の子どもたちの結果と比べてみると、韓国の子どもたちの行動表出の多さは、日本と中国の子どもたちの間だった。研究3の結果、動画を見る場面では韓国の子どもたちのポジティブな表情が少なかった。すなわち、これまで東アジアという範疇で扱われてきた日本・中国・韓国の子どもたちの行動は場面によって異なるのである。最終章では、これからの文化心理学では、国という視点に留まらず、遺伝情報なども取り入れた分析が必要であることを考察している。

2. 本論文の評価

研究1は *J of Human Environmental Studies*, 2018, 16, 51-56 に掲載済みである。3年間の博士後期課程で、言語の問題もあり、研究2と3については査読論文にすることは出来なかった。少なくとも研究3は、今後査読論文に掲載され得るであろう。

本論文が呈示したデータは、現在のところ、東アジアといっても日本・中国・韓国の子どもたちの行動は場面によって異なる、ということを示したにすぎない。

さらに研究結果の考察がまだまだ浅い。しかし文化心理学という分野に投げかけた問題は大きい。本論文では、あえて「文化」というものをきちんと定義せずに論を進めている。「文化」は定義するだけでも難問である。文化心理学において単に国を分析単位にすることへの疑問は明らかになった。多くの研究者に課題を提供したといえよう。

近い国でありながら、日本・中国・韓国の関係は様々な問題を抱えている。本研究が明かにした3か国の子どもたちの違いはささやかな事実であるが、このようなデータの蓄積が相互理解に寄与するのではないだろうか。

3. 本論文の審査の過程

本論文は2019年10月25日に提出された。同年11月4日に学長より審査の付託がなされ、同年11月12日に4名からなる審査委員会が発足し、審査が開始された。同年12月17日の第1回審査会では、多くの労力をかけた貴重なデータに基づく研究であり、博士論文として認めうる内容であることがまず確認された。ただし、各審査委員から詳細な意見や要修正箇所などの提言があった。これらの提言に基づいた修正稿が2020年1月7日に各審査委員に再提出された。研究方法の説明追加の必要性、総括的討論で深めるべき内容などが再び示され、2020年1月24日の博士学位申請論文公開審査会でさらに討論することになった。公開審査会及び最終試験では、研究方法の確認、研究結果の考察などの質疑がなされた。応答はほぼ的確で、相応の学力を備えていることが確認された。

最終的に、審査委員会は、上記「2. 本論文の評価」に示した点を踏まえ、本論文が文学研究科人間科学専攻の博士(心理学)の学位に十分値するものであると判断し、合格とした。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第18号

2020（令和2）年6月25日発行

発行 聖心女子大学大学院
編集 聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾4-3-1
電話 03-3407-5811（代表）